

---

# 突っ込み所満載の恋

暮乃りく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

突っ込み所満載の恋

### 【Nコード】

N2225D

### 【作者名】

暮乃りく

### 【あらすじ】

城東学園メンバーが繰り広げる日常の一コマ。今回は教師と生徒の危ない恋愛話…のはずがありません。登場人物の詳細については、ブログを参照(<http://sacrificenote.blogspot.fc2.com/blog-entry-14.html>)してください。

## 1 先生、頭大丈夫ですか？（前書き）

登場人物詳細はブログ参照（<http://sacrificenote.blogspot.fc2.com/blog-entry-14.html>）でお願いします。

一部過激な描写がありますが、ご了承の上で読んでくださると幸いです。

## 1・先生、頭大丈夫ですか？

「と、いうわけなのだよ狂夢君！」きょうむ

「小説だからって省略しても意味わかんないっすよ先生」

放課後の教室で数学の補修をやらされていた狂夢は、苦笑いしながら教師の鷺宮隆一さきみやりゅういちを見上げた。

数学の補修だったがプリントを配られて終わったので、ただの監査に全然関係ない国語教師の鷺宮が来てこの有様だ。

一人残されている狂夢に、ここぞとばかりに鷺宮は近づいてとある相談事をしていた。

「伊織ちゃんが欲しい」

うわ。

まっすぐストレートな表現で言われて狂夢は一步退いた。

鷺宮は負けずに一步近寄って力説する。

「僕の運命の花嫁は彼女なんだ。君は友達として協力するべきだと思っんだよ」

病気だこの人。

また一步退いて、狂夢はプリントをさり気なく机の遠くに爪で弾いた。

大体にして狂夢はわけがわからなかった。

なんでこの男は伊織が好きなんだろう？

この男性教師鷺宮隆一は、その芸能人顔負けのルックスに女生徒のファンを多数抱えている。

校内の美女もほぼ全員が確かこの教師のファンだったはずだ。

なのになんで、あんな女王様然とした白崎伊織が好きなのだろうか？しかも病的にまで想っている。

ひとつだけ思い当たる点は…。

「先生、ただ一人だけ自分をカッコイーって言わない伊織にむか

ついでます?」

隆一に迫られてもうすぐブリッジ出来そうなまでに身を反らしていた狂夢に苦しい声で聞かれ、隆一はキョトンとした。

何も知らない誰かが見たらその現場は、男子生徒に迫る危ない男性教諭の図だったが、思い直して椅子に座り込んだ隆一のおかげで、狂夢は苦しい体勢から逃れることができた。

「まあ…僕も最初はね、そう考えていたんだよ」

額に手を当てて考え込むその仕草すらキヤーキヤー言われそうなくらいに決まっている。

狂夢はシャーペンを握ったまま顎について、隆一を見た。

「でも、気が付いたんだ。それはきつと彼女からの一途なラブコールなのだと」  
ぶっ。

狂夢は盛大に吹いて机に頭を打った。

ついでにシャーペンの芯が折れてどこかに飛んでいった。

「伊織ちゃんは今朝声をかけると、小さい声でおはようございますと返事をして足早に去っていく。これは照れだね」

嫌がつてるだけなんじゃないかな。

思ったが狂夢は言わずにおいた。

「遠くから僕を見つめている視線を感じた。振り向くとそこには伊織ちゃんがいるんだ」

いやあいつ鷺宮隆一を呪い殺す藁人形作るって息巻いてたけど。

狂夢は突っ込みを飲み込んで、大人しく聞いた。

「僕の誕生日に、伊織ちゃんはなんと抱きついてきたのだよ。階段で抱きとめたのだけど、ロマンチックだね!」

いやそれ純粹に落ちただけだと思うよ先生。あいつ意外とどじっこだし。

「それに帰り道、僕の愛車で送ろうかと声をかけると顔を真っ赤にしていますって言って走って行くんだよ」

顔真っ青の間違いじゃないかな。先生病院で頭と目を診察してもら

ったほうが絶対いい。

狂夢がこう思うのもちゃんとした根拠があつてのことだった。

国語担当になった隆一は、授業中に度重なる恋愛術トークを広げて、まったくちつとも授業をしない。

国語という授業を愛してやまない伊織は、前々からそれに腹が立っていたのだった。

しかも隆一の振る舞いひとつひとつがキザつたらしくて、それは伊織の嫌悪感のドツボを突いていた。

それが溜まりに溜まって、伊織はだんだんと隆一に敵意を通り越した殺意を抱くようになっていたのだった。

案外と周知の事実であるのに、なんと隆一本人は気づいていない。それどころか自分へのアピールなのだと信じきっている。

「先生、あの、さ」

まじで事故に見せかけて殺されかねない。伊織なら絶対にやる。止めなければ。

狂夢はどう言い出そうか困って言葉を切った。

どうすれば隆一を傷つけずに諦めさせることが出来るだろうか。

このまま走らせていれば絶対に危ない。夜道にバットで撲殺されかねないのだ。

「なんだい？狂夢くん。……まさか！」

「へ？」

少女マンガよろしく驚きのポーズを取っている隆一は、狂夢をキッと見据えた。

「まさか君、伊織ちゃんを好きなんじゃない？！そうか！だから邪魔しようとしているのだね！」

なんだかとてもない方向に話を持っていった隆一に、狂夢はぎよつとして慌てた。

「ちよ、なんでそうなるんですか！？」

むしろ僕は先生の命を助けようとしてるのに。

隆一は構わずに椅子から立ち上がると、狂夢に向かってビシッと指

を突きつけて高々と言いつつ放った。

「僕は負けない！伊織ちゃんも僕のものだ！」

そう言うのと隆一はさつとキビスを返して教室を出て行ってしまった。狂夢は呆然としたまま隆一の出て行ったドアを見つめた。

「だめだあの人……」

翌日、朝に教室でいつも通りに集まっていた4人の話題は、昨日の狂夢の話で持ちきりだった。

「うっへーマジかよ。もう病気だな。怖え」

ちよつと茶化すように言つて、甲威は笑いながら伊織を見た。

「モテる女はツライねえ？」

「殺すよ」

ピシヤリと返されて甲威はきゃーきゃー笑いながらわざとらしく狂夢の後ろに隠れた。

面白そうなることになるのかと小さく笑いながら観察している男二人に、月江は深々とため息をついた。

「あのね二人とも。隆一先生は男なんだよ？伊織は女の子なの！分かってんの？」

「伊織がか弱い女だったら、いかついプロレスラーもか弱い婦女子だぜふひひひ」

いやらしくからかう狂夢を一発蹴って黙らせると、伊織は髪をかき上げて言った。

「しょうがないわね。殺るか」

「それ一番やばい方法です先生」

月江に宥められて、伊織は口を尖らせた。

「だってあと他に方法が思い浮かばない」

「先生、誰か白崎さんを保健室に。頭イっちゃってます」

小さく手をあげてしゃべった狂夢を一睨みして、伊織はため息をついた。

月江がよしよしと伊織の頭を撫でる。

「あたしが良い方法考えてあげるねっ！月江ママにまかせなさい！」  
「いやいや、ここは僕が最近作り上げた怪しい薬の実験台に」

「え、それよりも誰か激しいガチホモに先生襲わせた方よくない？  
きゃあきゃあ」

思い思いの考えを喋って勝手に盛り上がる三人に、伊織は頭痛を感じた。

本格的に奴をなんとかしなければいけないのだろうか。

もう授業で顔を見るのさえも苦痛な伊織にとって、それは生きた地獄に突き落とされる感覚だった。

しかも今日は一時限目に、まさに頭に花が咲き乱れているだろう鷺宮教師の国語がある。

何も知らない男子生徒は眠る準備派と鷺宮支持派に分かれているし、女子生徒は鏡を見て誰もが熱心に身だしなみを整えている。

毎度毎度のことで馴染みの光景だが、多分転校生が来たら「なんだこの異常は」とか言い出しかねない雰囲気だ。

「ねえ、いいこと思いついたお！」

ネットのやりすぎで語尾が怪しい月江に袖を引っ張られて、伊織は死んだ魚のような目のまま振り向いた。

本当に精神的に参っている伊織に一瞬ぎよつとした月江だったが、構わずに続ける。

「好きな人がいるんですって言えばいいよ！王道ちゃん！」

まさに名案と目を輝かせて言う月江に言われて、伊織はなんとなく狂夢達の方を見やった。

どちらかというと可愛い系の顔立ちをした美堂狂夢と、黒縁眼鏡をかけたまさに優等生然とした正統派男前の蒼条甲威。

狂夢と甲威、どちらも同じくらいに男女に人気があったが、告白される回数が多いのは甲威の方だ。

甲威は本音と建前を使いこなすが、狂夢は建前なんて言葉が辞書にない。

「蒼条くん！私、ずっと好きでした！」

「ごめん、俺は今そついうのに興味がないから」

こんなやり取りは日常茶飯事だったが、狂夢の場合は違った。

「美堂くん！私、ずっと好きでした！」

「ごつめーん 僕、カッコイイ男の人のが好きなんだあ きやるーん」

ちなみに、ものすごく本音である。

そう、美堂狂夢は自他共に認めるガチでホモだったのだ。しかもそれが、こつそりと伊織の思い人なのだから救われない。

好意を表すことに死ぬ程嫌悪感のある伊織に、しおらしく告白してみろという方が無理である。

そんなことになったら伊織は奇声をあげながら狂夢を5回くらい蹴つて殴つて、そのまま警察に御用になりそうだ。

言えるわけがない。好きな人がガチホモだなんて、実らないにも程がある。

伊織はしょんぼりと俯いて、「うん」と気のない返事を返した。

「おやおや、伊織ちゃんってばもしかして好きな人いないのかにやー？」

俯いた下からにやにやと狂夢に覗き込まれ、伊織は「いやあああ」と叫んで見事な膝蹴りを狂夢の顎にヒットさせた。

「ふ、ふははは…さすがは女格闘家免許皆伝の白崎（しらいな）。なかなかやりおるわ」

涙目でうずくまりながら顎を押さえて、絶対に伊織とは目を合わせないようにしながら狂夢が言った。

「あんたが悪い」

少し赤面しながら腕を組んで、伊織はふんとそっぽを向く。

伊織の気持ちを結構随分と前から悟っている甲威と月江はお互い目配せすると、にやりと黒く笑った。

「なあ狂夢。お前って友達大事にする奴だよな？俺ら、親友だもんな？」

「なんだよ気色悪い」

同じようにしゃがんで肩を組んできた甲威に、狂夢は青ざめて苦笑いしながら後ずさる。

「助けてやれよ、伊織を。結構困ってるぞ？」

「ああ……うーん」

ちらりと伊織を見上げて、狂夢は少し真剣に迷ったが「でも」と切り出した。

「逆効果にならないかな？俺先生好きだし。あ、いや、ラブな意味じゃないよ！？」

途中月江に射殺されそうなくらいに睨まれて、慌てて付け加える。

その凄みを聞かせた月江の視線が、突然につこりと微笑んで和らいだ。

「助太刀しないと殺す」

笑顔のまま紡がれたそれに、ムンクの叫びよろしく青ざめた狂夢は小さく「はい」と返事をするしかなかった。

少し驚いた展開になっている会話に、伊織は目をキョトンとさせて3人を見回していた。

「ほら、狂夢っち協力してくれるって！なんとか目覚まさせてやりなよ」

頼もしい笑顔の月江に、伊織は感涙に咽びながら抱きついた。

「月江え！」

「おーよしよし」

感動のシーンをしゃがみながら見ていた狂夢は、小さく笑ってぼそりと呟いた。

「白崎伊織さん、今日は珍しく苺模様のぴん」

続きの台詞は伊織の素早い蹴りによって打ち消されてしまった。

## 2・人間、追い詰められると結構簡単にされる(前書き)

とうとう始まる地獄の一時限目国語!どうなる伊織!どうする伊織!  
!?

## 2・人間、追い詰められると結構簡単にきれる

「ではこの問題を白崎君」

「じゃあ、改めてここを白崎君に解いてもらおうかな」

「白崎君、この答えは？」

「このクラスには私一人しかいないのかー！ー！！」

本日一時限目の授業は、自称愛の伝道師鷺宮教師の国語の授業だ。

いつもならば授業とか教科書とかそっちのけで、教師持論の恋愛トーク炸裂時間になっているはずが、どういうわけか今日は違った。

まじめに教科書のページを指定してプリントを配り、ごくごく普通の授業を開始したのだ。

鷺宮先生支持派はがっくりと肩を落としたけれど、それ以外の授業風景はいつものもの。

ひとつだけ違ったのは、なぜか問題を指名される生徒が白崎伊織ただ一人だけだということだった。

伊織の手によりど派手に狂夢の机が引つ繰り返されて、教室中の視線が伊織に釘付けになった。

怒りに震えながらキツと伊織は隆一を睨んだ。

「嫌がらせですか先生。何ですか、恨みでもあるんですか」

「あの、僕の机」

はわわわわと震えながら椅子に座ったまま青ざめている狂夢そっちのけで、隆一と伊織は見合う。

隆一はキザったらしく前髪を掻き上げると、ふふつと笑った。

「まじめに授業したがっていたから叶えてあげただけだよ、僕の子猫ちゃん」

「上等じゃゴルアアアアア！」

ヤクザも裸足で逃げ出すくらいの迫力で隆一に詰め寄ろうとした伊織を、すんでのところで甲威が後ろから羽交い絞めにして押さえつ

けた。けれどそれでも放れようと伊織が暴れる。その度に甲威は力加減をしながら必死に抑えるのだった。

「伊織危ない危ない、退学になっちゃうよー」

「ぼ、僕の机が、マイデスクが」

「うるっさい！！もう頭にきた！蹴る！殴る！殺す！埋める！」

暴行から殺害、そして隠匿まではつきりと言葉にする伊織に、さすがの月江も青ざめて凍り付いている。

人間、追い詰められると結構簡単に杀れる。

「多数の女子生徒から人気を得ているから、嫉妬しているのかい？可愛いなあ、伊織ちゃんは」

隆一の目には、富士山大噴火の如く怒っている伊織が「嫉妬する可愛い女の子」に見えているらしい。

どうすればそんなに強烈な脳内フィルターが働くんだ。

甲威はため息をつきながら、「そいやー」と気の抜けた掛け声と共に伊織の後頭部目掛けて手刀を振り下ろした。

大噴火から一転ぐったりと倒れた伊織を小脇に抱えて、えへっと笑顔を浮かべる。

「先生に絡まれて感極まっちゃった様子なので、落ち着かせるために保健室につれていきますね」

何か大きい荷物であるかのように担ぎ上げると、甲威は笑顔のまま「あははははは」と笑い声を上げて軽やかなステップで教室を出て行った。

二人が出て行った後には、「僕も罪な男だ」とかなんとか言っつつとっりしている隆一と石造のように固まった大多数の生徒、そして机を蹴られて青ざめたままの狂夢が残された。

「いやいや、素晴らしい卓袱台返しだったよ。歴代の雷親父も絶賛するくらいの良い飛びっぷりだった」

時は変わって昼休み。

いつものように机を2つくつつけたテーブルに、4人は所狭しとお

弁当やパンを広げてランチタイムに入っていた。

にこにこと上機嫌でパンを頬張りながら笑う甲威を見て、伊織はぶすつとふてくされた。

伊織に負けず劣らず不貞腐れている狂夢が箸をぎりぎり齧りながら唸るように言う。

「なんだって自分の机じゃなくて僕の机なんだよ……。ああ愛する僕の机」

狂夢の席が伊織の斜め後ろで非常に蹴り易い位置にあったのはわかるが、どうにも解せない。

箸が折れそうなくらいに噛み締めている狂夢の頭を撫でて、月江はうんうんと頷いた。

「伊織の鉄拳の矛先は、例えば沖縄と北海道くらい離れててもあんたに向かうわ」

「なんでー！？不思議過ぎてもはや不気味！いおりのいじめっこーうわーん！」

漫画のように表情がコロコロと変わる狂夢にみんな笑うが、只一人伊織だけはやっぱり死んだ魚のような目をしたまま空ろだった。

一時限目のあの時間保健室に運ばれた伊織はそのまま国語の授業を丸々休み、二時限目から授業に出た。

けれど追い討ちをかけるように伊織の机の上には宿題のプリントが置かれていた。

恋愛とは何か自論を述べよ。

伊織はすぐさまに投げ捨てようとしたが、皆が渡されていたことを知って思い直した。

宿題はほぼ全てが成績に響く。嫌でも提出しなければ、もしかしたら留年なんてことになるかもしれない。

最悪「伊織ちゃんと少しでも長く授業がしたい」なんて理由で通知表に赤い煙突を建設されたら溜まったもんじゃない。

ずっと黙りこくっている伊織に、月江は小首をかしげて近づいた。

「伊織？」

「あつ」

弾かれるようにして顔をあげた伊織は、苦笑いしながら3人を見渡す。気付けば皆こつちを見ていた。

「ごめん、ちよつと……暗殺について真面目に考えてた」

途中からガラリと声のトーンを落として喋りだした危険思考に、月江と狂夢はアワワワと手を取り合って震えた。

一方甲威はと言えば楽しそうにくすくす笑っている。

「僕、一度人間解剖してみたかったんだあ」

殺ったら死体の処理は任せてね

にこにこ平和に微笑んでいるくせして喋ったことは伊織より更に酷い甲威に、狂夢と月江が仲良く揃って突っ込んだ。

「お前が一番やばい……」

「ほら僕、サドだし」

そう、この蒼条甲威という男は温和で優しそうな黙っていればそれはイイ男なのに中身はかなり飛んでいる。

将来の夢なんてないけど、お金持ちの高飛車マダムを×××で×××にしたいとか言い出す奴だ。

けれどそんな内面は仲良くて極限られた人にしか出さないから、一向に甲威の人気は落ちない。それどころか成績優位を取って名前が廊下に張り出されるたびに、告白してくる女子が増える。

「でもさ甲威！なんであんなこと言ったの？あれじゃ先生ますます勘違いしちゃうじゃん！」

月江が卵を突き刺したままの箸でびしつと突きつけて言った。

そう、伊織が大噴火で大激怒していたのを止めた時に喋ったあの一言二言三言は、確実に隆一の勘違いを増幅させる結果になっていた。

「え、別に嘘は言っていないよ？」

確かに、絡まれて感極まったと言ったものの、恋愛的な要素で照れてからとか恥ずかしいからとかは微塵も言っていない。

言っていないからこそ、相手は都合良く解釈する。

なんとも策士的な台詞に、月江はぐぬぬぬと拳を握った。

「それに」

そこでまたにつこりと天使のような微笑を浮かべてから、甲威は続けて言った。

「僕、泥沼大好き」

「やっぱりお前が一番最悪だー！ー！！！」

狂夢と月江のハモった突っ込みが響いた教室で、伊織は一人ため息をついた。

放課後が、怖い。

### 3・乙女心は案外と複雑なものでした。まる。

午後の授業は気だるいもので、歴史と数学の二時限はほとんどがお昼寝時間となっていた。

「授業をさぼるなら留年すればいいじゃない」がこの学園のモットーなので、起こしてくれる優しい教師なんてほとんどいない。

そんなわけだからその二時限はとても静かに行われ、あっという間に帰りのホームルームが終わって放課後の掃除時間がやってきた。

「それで、打開策みたいなのは浮かんだ？」

長い廊下を箒で適当に掃きながら、月江はちりとりを持ったままぼーっとしている伊織に話しかけた。

「うん、と…さ」

無表情のまま伊織が振り向く。片手にはチリトリがきつく握られている。

「どうしたらこのチリトリで奴を倒してレベルアップすることができと思う？」

だめだこりゃ。

月江は大げさな溜息をついて、伊織の横に並んで一緒に壁に寄りかかった。

「今日さ、狂夢っちに家まで送ってもらいなよ」

「え？」

驚いて目を瞬く伊織を見て月江はにっと笑う。

「いつも放課後には先生に話しかけられてたけど、内容って普通のだったんでしょ？」

こくりと伊織が頷く。

「でも狂夢に協力要請したってことは、本格的に迫ってきそうじゃない。今日の授業みたいに」

言われて遠い目をした伊織の視線が、遙か遠い時限の彼方を見つめる。放っておいたらこのまま風化しそうな伊織の頭を撫でて、月江

は続けた。

「だから、狂夢っちと帰るんだよ。昨日、勘違いだったけど宣戦布告されたみたいだし、都合良いじゃん」

それで両思いに発展するなら大儲け。

えへへと笑う月江に、伊織の溜息が混じる。

「狂夢に迷惑かけちゃうよ。それに…」

そこで伊織は言葉を切った。

確かに協力してもらって隆一を遠ざけることはとても嬉しい。けれど、きつとそれまでだ。狂夢はこれからもずっと女の子に憧れて女の子になりたがるホモだろうし、伊織のこの気持ちが受け止められるはずがない。

なんとも複雑な状況に改めて伊織は落ち込んだ。

さつさと諦めてしまえばいいのに、それが出来ないから最悪だ。しかも、彼女がいるならまだしも男が好きだなんてなんか許せないむきー。

考えていることがそのまま顔に出てたのだろう、いつの間にか月江がにやにや笑っていた。

「いつやーん、いおりんの乙女ー」

「勘弁してよお」

伊織は困ったように苦笑いして、廊下の突き当たりを見た。そこには、狂夢と甲威が掃除している姿がある。もう掃除は終わったのか、二人してなにやら雑巾を投げたり雑巾を投げたり雑巾を投げたりしている。

「でも、いいや私」

甲威に捕まって技をかけられ死ぬ死ぬ騒ぎながらも笑っている狂夢を見て、伊織はふつと微笑んだ。

「あいつの親友って位置だけで、結構嬉しいから」

いつの間にか廊下には夕日が差し込んで綺麗な橙色に染まっている。月江は「うん」と頷いてにつこり笑った。

4人の行動は校門で手を振って別れるまで一緒が日常だったが、今日は一足先に伊織と狂夢が帰ることになった。

なんでも、いつも通りじゃなくてラブラブなのだといった感じに隆一が捉えてくれるように考えた月江の提案だった。

狂夢は、朝の一件ですっかり月江の言うことを聞く素直な良い子になっている。

オプシヨンと言う名で手まで繋がれた伊織は、友達でいいやーなんて言ったのにやっぱりときどきしていた。

女の子になりたいとか日々言っているくせに、狂夢の手はゴツかつたし体格だつてやっぱり男の子だ。

にやにやしている月江と甲威に見送られながら玄関を出て歩いていったが、やっぱり恥ずかしくて伊織はずっと俯いたままだ。

「たまにはこういう普通なのも面白いね」なんて

茶化するように伊織を見下ろした狂夢は、急激に照れだした。

びっくりなことに、あの伊織が赤面して俯いている。

「あーいや、うん」

狂夢だつて女の子が嫌いなわけじゃない。

初々しく赤面しながら歩く二人の背後を、月江と甲威はコソコソと尾行していた。

「思いのほか雰囲気いいな、二人」

「カップル成立とかになんないかなー!」

「えー、それじゃ俺つまないわ」

「俺とか僕とか本当に忙しいね君」

木の後ろに隠れて見守っていた月江が、あつと声をあげた。

「甲威、あれ」

ちよいちよいと制服の袖を引っ張って月江が指差した先には、先生自慢の白い外車が止まっていた。

校門の近くにビッシリと着けられ、いつの間に着替えたのか外出用のスーツ姿の隆一がサングラスをかけて立っている。

「おおっとこれはこれは面白い展開ダー」

本当に楽しそうに歓声をあげる甲威の足を踏んで、月江は睨んだ。  
「がんばれ狂夢っち！失敗したら分かってるよね！」

赤面から一転青ざめた伊織は妙に決まりすぎている隆一を見て一瞬で石化した。

一人で歩いていたら白昼堂々拉致されかねないような状況だ。

狂夢はあわあわと伊織と隆一を見比べていたが、やがて冷や汗を掻いた苦笑いを浮かべて切り出した。

「先生、あのー…」

えーと、なんだっけ。

狂夢はすっかり困って焦って頭が真っ白になってしまった。

その状態を見た隆一は成程と面白くなさそうに小さく息をついて、サングラスを外した。

気付けばいつの間にか少数のガヤが遠巻きに3人を囲んでいる。

「狂夢くん、僕は負けない！伊織ちゃんの心は僕が頂く！」

「いや、その、違」

冷や汗を浮かべて慌てる狂夢に昨日のままビッシリと指を突きつけた隆一は、ふっと前髪を掻き揚げて伊織に近づいた。

「さあ伊織ちゃん、行こう」

「伊織…」

狂夢が不安気に伊織を見下ろすと、なんと俯いて震えている。ハッとして拳を握り、狂夢はどんどん縮んでいく二人の間に割って入った。

「先生！強引なのは良くないと思います！！」

「狂夢くん、邪魔だ。退きなさい」

「伊織は嫌がつてるじゃないですか！」

実は怒りに打ち震えていた伊織だったが、狂夢のその言葉にはっと顔を上げた。

これからどうやって打ちのめしてやろうかなんて考えていた伊織に、その言葉は青天の霹靂だった。

「狂夢……っ」

いつもは悪ふざけしているくせに、ここぞという時は仲間思いの彼。伊織は改めて狂夢への気持ちを確認すると、少女マンガよろしく目をつるつるさせると狂夢に飛びついた。

「狂夢……！！」

「うわ」

「え？」

飛びついたついでと言わんばかりに伊織に突き飛ばされた隆一は、派手に後ろに倒れこんだ。

まさかそんな状態で突き飛ばされると思ってなかった隆一が構えているわけもなく、そのまま派手に愛車に後頭部を打ちつけて大人しくなる。

「あれ？」

わわわと両手を挙げたまま狂夢が目を白黒させる。

自分は何もしていない。

「あ、あの、伊織さん、今なにし……」

「狂夢、やっぱりちゃんと考えてくれてたんだねっ」

「いやもうえ？え？」

混乱している狂夢と、感激している伊織に、ふたつの影が走り寄った。

「さすが狂夢ー！かつこよかったよー！」

「僕的にはイマイチ詰まらない展開だったなあ。M狂あたりが出てきてこじれさせてくれれば、最高ののに」

月江は感激して狂夢と伊織に抱きついたが、甲威は不服そうにぶつぶつと文句を言っている。

やがて、あっと閃いたかと思うと、甲威は何気なく完全に気絶している隆一をかつぎあげた。後頭部には可哀想なまでに腫れたタンコブが見える。

「うふっふーん」

いきなりご機嫌になった甲威を、3人がハッと振り向いた。

まさか。

甲威はまるで大きな荷物でもあるかのように、隆一を乱暴に車の後部座席にぼいっと投げ入れた。それから華麗なステップを踏んで、ドアを閉める。

いい笑顔で甲威は堂々と車の運転席のドアを開けると、3人に片手をあげた。

「じゃっ！」

「じゃっ、じゃねー！！！！」

狂夢と月江は声を八もらせながら、あわてて甲威に飛びついた。白昼堂々教師が生徒に拉致されそうになっている。

「なんだよもう邪魔するなよー僕の素敵な実験日和がー！」

「犯罪者になるぞ！？テレビで僕らが取材されたらどうするんだよ！」

「そーだよ！やだよ私友達から逮捕者出るの！！」

車の運転席でわやわやと騒いでいる3人を見ながら、伊織は改めて抱きついた事実を確認して一人照れていた。

細かったが、案外としっかりした体つきだったように思う。

頬に両手をあててパアツと赤面した伊織は、やーだー！とか叫びながら恥ずかしさに悶えるのだった。

その後、無事に鷺宮教師は他の男性教師の手によって無事に自宅まで送られていった。

後日談であるが、あの時の後頭部強打で隆一は完全に最近の記憶を失っており、ここ2日の大騒ぎ事件はまったくもって無かったことにされてしまったのである。

「残念な結果だったけど、ちょっといおりんトキメいたでしょっ」

「そんなことないです」

「あらいやだ伊織ちゃんてばあ！月江ママにはホントのことを言ってもいいんだよ」

「まったく本当にそんなことないです」

教室でいつも通り昼食を取っていた4人だったが、この日だけは伊織と狂夢が月江に散々からかわれることになったのだった。

### 3 乙女心は案外と複雑なものでした。 まる。（後書き）

なんだかドタバタした終わりになりましたが、これで短編読みきりは完結です。

最後まで読んでくださってありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2225d/>

---

突っ込み所満載の恋

2010年10月12日14時43分発行